
韓国書誌学に関していくつか考えること

— ウェブを通じた韓本(朝鮮本)研究 —

河 廷 龍*

序論

本稿は『韓本研究入門』という本を書くための前段階として、純粋な筆者の断想のうち、ウェブを通じた韓本研究にとって必要な内容のみを集めて提示するものである。本稿は、短い期間ではあるが、韓本に対する調査、研究に従事するなかで考えてきたことについて、できる限り易しく書いたものである。したがって、随想的な色合いも帯びた文章になるが、韓本に対して一度たりとも関心を持ったことのある人々には有益なところがあることを期待しながら、筆者が考えている幾つかのことや、関連情報を整理して提示したいと思う。

1. 考古学の遺物

筆者は学部から大学院博士後期課程まで、すべての学位課程を史学科で学んだ歴史研究者である¹⁾。学部時代から韓国古代史を専攻してきた私は、歴史家は歴史研究や解釈のためには必ず考古学的な知識が必要であることに気づいた。筆者は韓国ソウル特別市を二つに分けて流れる漢江の上流にある京畿道河内市湊沙里へ行って遺跡を掘ってみたことがある。また、1年足らずの間、発掘と実測などの考古学的な研修を受けたこともある。

唯物論的な学問としての考古学は非常に魅力的なところがあるが、その解釈において人間ができることには非常に限りがあるように思われる。不十分な遺物に基づく推測上での解釈よりは、より多くの遺物の発見と発掘を待たなければならない時がある。結論を急がず、このような忍耐力を持ち続けることは、考古学者に求められる当然の義務であると言っても過言ではないだろう。そういう時間的な苦痛に堪えきれなかった極めて一部の考古学者により、偽造が行われたことがあったのは誠に残念なことだが、心情的には十分に犯しうる過ちであっただろうことは想像に難くない。

本論に戻るが、私はすでに長い間文献史学に馴染んできたためか、遺物を見ながら遺跡の全体像を復元しようとする熱情や能力が不足していることを感じてきた。具体的に言えば、たとえば錆びた鉄器、割れた器の残片などの遺物に触れても、それに対する愛情が湧き出てこないという表現が適切かもしれない。しかしその後、研修と実習を通じて報告書が読めるようになったり、考古学と歴史学の接点において2つの学問の長所や短所を比べてみて、その応用には方法論的な問題点が少しわかるようになった。そして、同じようにしか見えなかった陶磁器にも、それぞれ作り方や時代が少しずつ違うことに気付いたり、遺物の名前などが少しずつ分かるようになったりしたことは大きな収穫であった。さらに、いまだに筆者には同じもののようにしか見えなかった遺物に対して、

そこには少しずつ違うところがあることを指摘しつつ意見を述べる考古学者たちと出会って、感動を受けた経験も数多くある。

また、そのようなわずかな差を、遺物の周辺、即ちその時代と製作技術、そして特性などの歴史解釈の道具として使う考古学という学問が理解できるようになった点は、筆者にとって非常に大きな成果であった。しかし、そういうものを見分ける眼識は一瞬に成り立つことでもなく、また私自身にもそういう能力がないことを実感した。逆に言えば、そういう眼識のない人が考古学に従事できないということも、自分の限界として認めざるをえなかった。

もちろん、歴史学と考古学という2つの学問の範疇について、一度詳しく考えて見なければならぬ点は、やはり考古学は歴史学の周辺学問として、歴史研究に役立つ大きな方法論と膨大な資料を提供してくれるとはいえ、厳密な意味での考古学そのものは、やはり歴史学ではないと言えることである。そういう意味で、考古学者も歴史学者ではなく、筆者がたとえ考古学における発掘に参加しているといっても、考古学者として参加していない限り、それはあくまでも歴史研究にとって必要な史料を探るためにやっていることである。そして、歴史の一場面を解釈のためにやっていることであって、歴史学の範疇においてやっていることではない。

しかし、考古学における遺物に相当するものが歴史学にも存在することに気付いた。それが文献であり、厳密に言えば原本である。原本というのは文献資料の元のもので、例えば『三国遺事』の場合、韓国や日本で現在もいろいろな本が出されているが、その中で本来のものである漢文で書かれているものを原本という者もある。しかし、それは植民地時代に出された『三国遺事』や朝鮮時代に刊行された『三国遺事』を台本にして出された新式活字本あるいは洋装本である。そして植民地時代に出された『三国遺事』も、朝鮮時代の中宗の時、すなわち西暦1512年に出された木板本の線装本を底本にして出された本である。このため、1512年に出されたいわゆる皇明正徳壬申本『三国遺事』が原本といえるだろう。しかし、私は皇明正徳壬申本『三国遺事』が、それより先立って刊行された1394年本『三国遺事』を版下本にして出されたものであることを明らかにしたことがある。結局、今のところ、現代版『三国遺事』の原本のそのまた原本が本来の原本であると言えるのであり、それが1394年本『三国遺事』であるだろう。『三国遺事』はこのような板本の層位を有している。こうした原本は国家指定文化財として、国宝や宝物に指定されている。このような原本も一つの遺物であり、そして文献学が取り扱わなければならない遺物である。

2. 史学と書誌学

筆者はかつて、文献史料としてその原本である板本などを取り扱う歴史学と、いわゆる古書とか古本の著述時代や著者、刊行地などを調査研究する書誌学はどういう関係にあるのかという問題に関して問われたことがある。また、最近筆者が発表した論文を見て、多くの歴史学研究者たちから、「これって史学論文でしょうか？」とまで聞かれたことがある。古代、中世、近世など、あるいは新羅、高麗、朝鮮時代など一定の時代区分によって歴史関連学会や研究会が分けられている今日、これはどの時代の論文になるのかという質問は、必ずしも愚かな質問でないかも知れない。しかし、古代に時代区分される古朝鮮から三国時代を経て高麗時代までの歴史叙述において重要な手掛かりを与えてくれる『三国遺事』という説話集に関する論文は、果たしてどの時代の研究なのかを見分

けることは、極めて難しい作業であろう。なぜならば、この『三国遺事』は高麗時代の僧侶一然が書いた書籍であるが、『三国遺事』が実際に刊行された時期は朝鮮時代であるからである。したがって、上記のような質問に対しては、筆者は正攻法ではなく迂回的なかたちで、こういう『三国遺事』に関する研究は史学史的研究あるいは史籍研究あるいは私が歴史書誌学に属するものであると答えたことがある。ところが、ここでいう歴史書誌学は私が歴史考古学という学問を思い起こして即席で造り出した概念であって、実際には用語反復的なものに過ぎず、適切なものではないと思う。それがなぜであるかについて語ってみたい。

植民地時代には韓国の史学と書誌学は今のように学問的に分類された領域ではなかったはずである。その証拠に、実際に歴史学者たちが書誌学に関する数多くの論文や論説などを発表して来たが、これが少しも妙なことと思われることはなかった。その当時、韓国植民史学の大家であった今西龍、末松保和を始めとする歴史家たちは有名な蒐集家で蔵書家でもあったので、書誌学者ともいっても何ら問題はないだろう。また、現代の韓国書誌学を代表する元老学者である千恵鳳成均館大学名誉教授や孫宝基延世大学名誉教授などが史学科の出身であることも周知の事実である。このような現代の事実に照らして考えてみても、元々史学は書誌学であり、書誌学も史学の一つの分野であることが分かる。もちろん、これら2つの学問がまったく一致するというわけではなく、ただ基本史料あるいは資料を扱うという点においては、学問的に重なっている部分が非常に大きいということを言いたいのである。

周知のように、史学は狭い範囲で定義すれば史料批判の学問である²⁾。古代歴史ロマンにはまっているマニアの場合は、何を言ってもその責任を問われなくても知れない。特に資料を扱うときに、その資料の史料的な価値に関して客観的な立場で批判をしていないこともたまに見受けられる。しかし、過去の事実はさまざまな時代のねたみによって、一つずつ灰燼の中に葬り去られ、現在残っているいくつかの書冊、金石文などを通じて現在の歴史研究者たちは解釈を施し、歴史叙述をおこなっている。このような資料を史料と言い、その史料の中で、前代及び当代の歴史記録が盛り込まれた歴史書、すなわち史書がどれほどのリアリティーを担保にしているのかについて考察する作業が史料批判と言える。それぞれの史書が叙述された時代背景、著者の性向・階級・身分等を分析しながら、記録に対する冷徹な批判を通じて歪曲という不純物を取り除く作業が史料批判である。そして、このような史料批判は1次・2次史料批判、あるいは外的・内的史料批判に区別されている。書冊の形態的な分析は1次的なことながらも外的な史料批判と言える。そして、その本の内容を通じて2次的に、あるいは内的に史料の内容がどういう時代性を反映しているかなどに関して、他の史書と比較してみて、どの程度の真実性を含んでいるかなどをよく調べる作業が求められる。

例えば、ここに13世紀の歴史解釈にとって非常に重要な資料を提供してくれる本で、14世紀に書かれ、15世紀に刊行されたというものがあるとしよう。その表紙は18世紀のものであり、書体は17世紀のものであり、紙もおおむね17世紀の特徴を有しているとすれば、果してこの本は15世紀に刊行されたものか否かについて、疑問を持って調べる必要がある。こういう本を調査してみると、筆者は躊躇なく15世紀に刊行された板本を台本、すなわち版下本にして17世紀に覆刻した本であると判断できるだろう。そして、それが何らかの理由によって表紙が毀損したので、18世紀に改装されたものであるとすれば、その資料に関する外的すなわち形態的な問題は解決される。したがって、この本の価値を研究するためには、15世紀に刊行された初刊本との精密な対校を通じて、この本が

15世紀の姿をそのまま保っていることをまず確認しなければならない。もし15世紀の初刊本が現存しないとすれば、その本の史料価値についての判断を下すためには、精緻な内的史料批判の結果を待たなければならない。しかし、この本の一部分に17世紀になって始めて登場する歴史的人物や、新たに変更された地名などの歴史的な用語が出てきたら、この本は内容的にも17世紀の姿を保っていることになる。この場合、この本の史料価値は特別な内容を記していたとしても、少なくとも17世紀の他の史書よりも、その史料価値が落ちると言えるだろう。そして、他の史書には見られない記述内容が含まれているとしても、その史料価値を信じようとする歴史研究者は多くないだろう。

一方、もし初刊本の残本がすこしでも残っている場合、それとの比較も必要となる。部分的であっても精密な校勘の結果にあまり差がなく、本当の復刻版であるとすれば、その史料価値は15世紀の初刊本とほぼ等しいと言えるだろう。もし、15世紀の初刊本と内容が違うところがあったり、誤字や脱字が相当数みられたりするならば、その本は史料的な信憑性のある程度欠いていることを常に念頭におきながら、極めて慎重かつ批判的に利用しなければならない。

このように史料批判における1次的な外的史料批判が、すなわち書誌学における、いわゆる形態書誌学者たちが行う仕事でもある。そして対校なり校正なりという作業も書誌学の一領域でありつつ、また歴史学者たちが行っている作業でもある。したがって、書誌学と史学は肝心な部分で等しい作業方法と環境を共有していると言えるだろう。なぜならば、書誌学も史学も、ともに文献資料を研究対象としているからである。このような側面において、史学の本領、すなわち史料批判の半ばを占めている外的な史料批判を書誌学が共有していると考えられる。このような側面から見れば、歴史的に価値がある書籍を調査するに当たっては、書誌学者と歴史学者の区別は無意味であると言いつても過言ではないと思われる。

しかし、最近韓国の大学で人気を集めている図書館学もしくは文献情報学を専攻する研究者の中で、書誌学、特に形態書誌学を研究する学者の数は、残念ながら指折り数えられるほどしかない。21世紀の情報化に伴い、これに関連するいくつかの人気ある分野に関心が集まり、幅広く書誌学を研究する学者の数は非常に少ないと言えるだろう。韓国よりも書誌学研究がいち早く進んでいた日本においても、現在の状況は韓国とさほど変わらない。かつて全盛期を謳歌していた日本の書誌学界では元老学者たちが一人ずつ亡くなり、現在ではさほど研究者の数は多くはないという印象を受ける。国語学や国文学を専攻している研究者たちは、みずからの研究テーマと係わる書誌研究は深く進めてはいるが、それらは印刷、出版の歴史と係わる書誌学の基本的な研究領域とは直接的には繋がっていない。むしろ活字の復原、木版の覆刻など、書誌学における多様な試みは、数少ない幾人かの司書たちによって行われているだけなのかも知れない。

このような状況を克服して、新たな書誌学を復活させるためにもっとも必要なことは、史学と書誌学との接木と連帯であると筆者は考えている。しかし、今日の現状は、むしろ両学問の領域間に壁が作られているような状況にある。歴史学界では史書に対する外的な史料批判は書誌学者たちの仕事であるとみなす一方、書誌学者は史書に対する仕事は歴史学者のなすべき領域であると考えているのである。もちろんこの2つの学問領域の間には境目があるが、あえてその壁を乗り越えて、20世紀初頭にみられた史学と書誌学の未分化の状況に戻らなければならないと思う。

結局のところ、歴史関連の書籍を含む史料に対する研究は、史料学を担当する史学の担当部分に

なり、文献資料を担当する形態書誌学者の担当部分にもなるのであるが、史料批判の肝心な部分から目をそらせたり、これに取り組もうとする研究者が少ないという今の姿は、いわゆる「人文学の危機」をもたらした、この時代の自画像に他ならないのではないかと思う。

3. 研究対象となる古書

歴史学者や書誌学者たちが扱うところの古書という概念は、単に古本屋で売っている古書を指しているのではない。一般的には、広義には中古になった本の意味で、古本屋で売っている古書の意味もある。しかし、狭義の古書概念には時期的制約が伴う。時期的な制約を厳密に言えば、韓国では近現代以前、すなわち朝鮮時代の本を歴史学者や書誌学者は古書といている。もちろん、これは1910年に始まる日本の植民地支配以前のことを指している。しかし、最近では一部の人は朝鮮戦争（1950年-1953年）以前の本を古書といたり、1970年以前の本まで含めて古書と言ったりするようにもなった。もちろん、時代の変遷に伴って、古書の時代的概念も変遷するのは当然のことである。しかし、歴史学者や書誌学者たちが言うところの古書は、単に刊行された時期のみならず、紙、綴じ型、装丁、印刷方法なども考慮した上で決められるものである。そして、木版本と線装丁本が特徴である韓国の古書は、1910年を境にしてその消滅期に入ったと言っても過言ではない。しかしながら、1920年代や1930年代になっても、諸地域で木版本による族譜などの刊行が続いており、いわゆる線装本もその中には少なくない。また、1910年以前でも漢文や英文や国漢文などで書かれた洋装本も刊行されていた。したがって、書誌学者たちが古書の所蔵先に行って文献リストや文献目録を作成する時、調査対象となる古書は、いわゆる漢籍である。漢籍とは、元々中国人によって漢文で書かれた書物を指すものだが、韓国ではハングルによる漢文の諺解本などのいわゆる韓籍をも含む概念でもあり、洋装本あるいは洋書と区別されるものである。

結論的に、歴史学者や書誌学者たちにとっての古書とは、1910年以前に朝鮮で刊行された漢籍を指す概念である。とはいえ、1910年以後であっても韓半島で伝統的な方法で刊行された一部の漢籍を含む概念でもある。

4. 朝鮮本と韓国本

筆者は来日後、各地の所蔵先で目録などの書誌調査を始めた頃、朝鮮本という用語をはじめて聞いて、何の疑問も持たずにそのまま使ったことがある。いまだに韓半島を朝鮮半島といい、北韓を北朝鮮といい、韓国人も朝鮮人という日本人に接する機会が少なくない。自分が大韓民国の人間だからかも知れないが、朝鮮という言葉にはすこし威圧感を感じ、そういう用語の使用が適切なのかということについて疑問を持つようになった。しかし、そういう疑問に対する正解を求める前に、筆者も朝鮮本という単語を自分のいろいろな論文と発表会場で使った事がある。そういう状況で、急に朝鮮本という用語に対して検討を加えるのは、もう遅きに失するような気もする。しかし、今でもなお必ず検討しなければならないはずにもかかわらず、いまだにこれに関する問題提起は行われていないようである。

朝鮮本の「朝鮮」というのは、日本でいういわゆる李氏朝鮮、すなわち朝鮮時代の朝鮮をさして

いると思う。これは高麗時代に刊行された本は高麗本といているので、分かることである。しかし、高麗時代に刊行された本も高麗本といわずに、ただ朝鮮本という場合もあるので、その限りでもないことがわかる。朝鮮時代に刊行された本を朝鮮本と言ひ、高麗時代に刊行された本を高麗本ということは、時代区分とかを踏まえたときには問題がない。しかし、単に韓半島あるいは朝鮮半島で刊行された本ということだけで、その古書を朝鮮本というのはその本の時代性と地域性、また様々な特性などをまともに説明しているとはいえないと思う。さらに、高麗本や朝鮮本だけではなく、新羅本も存在している。だから、それを一緒にして、全てを朝鮮本というのは、学術的にも何かを欠いているような気がする。

最近、韓国の国立文化財研究所で発行された書物では、日本でいうところの朝鮮本を韓国本と称している。韓国本なら大韓民国の縮約語としての韓国で、「南韓」あるいは「南朝鮮」を示すものと思う。もし、そういう意味であることに間違いがなければ、果してこの韓国本という用語が、かつての新羅、高麗、朝鮮時代に出版された古書をすべて含む意味としては適切でないと思われる。現代韓国の地域で出された本という意味でもないので、おそらく調査主体が韓国であるからということだけのことである。そして、地域的には北朝鮮地域を含め、また昔の高句麗や渤海の統治領域地域で刊行された本も含めることができる用語、時間的には朝鮮時代は勿論、新羅、高麗も内包できる概念の導入が必要とされる。このような側面から、朝鮮本という名称も韓国本という名称も、すこし不完全であるといえる。

古くから、現在の韓半島を指す単語として、青丘、朝鮮、震旦、三韓などいろいろな用語が使われてきた。筆者はここで辰韓、弁韓、馬韓の三韓が、それ以後の高句麗、百濟、新羅を示す用語としても使われたこともある。もちろん朝鮮民主主義人民共和国では「朝鮮民族」としか言ってないが、韓国と北朝鮮という政治的な言葉から離れて、韓という用語は韓国や北朝鮮を統合する名称としても大きな問題はないと思われる。

もちろん、この韓という概念は辰韓、弁韓、馬韓の三韓から由来した用語である。そして先述したように、中国の漢籍とも違って、韓国の漢籍という意味で韓籍という用語を使って来たことがある。したがって、筆者としては韓籍または韓本という用語が適切だと思われる。時代だけではなく地域的にも今の韓半島だけではなく歴史上の領域を大体内包するからである。もちろん朝鮮民主主義人民共和国では三韓を韓半島の南地域の今の韓国に限定しているが、しかし馬韓の場合は古朝鮮が滅亡するB.C.2世紀から韓半島の西北地域から南下してきた政治勢力である。そして、中国や日本では三韓を国家だけではなく民族としての概念を念頭において、韓民族を称する用語として使っている。

一方、日本では朝鮮本という用語だけではなく、昔から、中国の古書を唐本、日本の古書を和本といい、韓国の古書を韓本ともいつてきたことがある。そして幸いにもすでに日本の大阪府立図書館などでは韓本という用語を使って展示会を開いたり、目録を刊行したりしたことがある³⁾。したがって、いわゆる朝鮮本に対しては、少なくとも日本では韓本という用語の使用が適切であると思われる。

5. 骨董品と文化財

韓本の研究について語る前に、一つだけ述べておきたいことがある。それは古書に対する最近の社会現象に関することである。韓国では最近、古物商や文化財関連の専門家が出演するテレビ番組で、家宝として伝わってきた古物の鑑定を依頼する趣向のものが人気を集めている。その骨董品が本物であるかニセモノであるか、そして、現金でいくらぐらいの価値があるかについて専門家が詳細な情報を準備し、まるで探偵のように、面白おかしく理屈をつけて鑑定を行っている。それゆえに、骨董品を持っている人もそうでない人も、興味を持って視聴している。また、こうした番組は韓国のみならず、日本でも大きな人気を集めているようである。最近では、絵画や陶磁器のみならず、書籍も結構登場している。たまには有名な人物が書いた筆写が入っている書簡が付いていたりして、その本に対して高額の鑑定をなされることもある。このような番組によって、これまで旧家の納戸や倉に置き忘れられていた書籍や古物が骨董品として蘇り、遂には文化財として華麗なる復活を果たす場合もある。こうして、新たな宝探しが全国的に始まっている。

その結果、かつては古本屋の主人が、「その本を買って下されば、このぐらいのものはサービスで差し上げますから持って行ってください」などと言いながら差し出された類のやすい古本でさえ、アマチュアたちによって、まるで文化財でもあるかのように貴重に扱われている場合すらみられるほどである。もちろん古書を大切にするのは決して悪いことではないが、問題は文化財であるとか、学術的な価値があるので大切にされるのではなく、ただ高いものかも知れないということだけで大切にされることにある。しかも、現在でも古書店で二千元、三千元払えば買うことができた本も、ソウル市内の清溪川沿いに形成されている骨董品通りに行けば、半分遊びがてら宝探しに出てきた一般の人々には一万円、二万円で売られたりする場合もある。そして、こうした本を購入した人が、個人のホームページやブログなどで、まるで文化財でもあるかのように紹介する風潮が見られるのは、たいへん残念なことである。このような現象は文化財的な価値や学術的な価値がある古書のみならず、すべての古書を金銭的価値に還元して考える弊害を広めているともいえる。

古書すなわち古本は、当代に著述されて印刷出版された社会文化史的に非常に重要な資料であることには違いない。そしてその希少価値によって、また、その内容によって重要な史料になる場合もある。しかし、古書が文化財的な価値や学術的な価値から離れて、ただ商品的な価値のみを持つようになる時、問題は極めて深刻なものになると思われる。特に価格に関しては、そんな値段で一体だれが買うのだろうかという疑問まで生じるほど、古本屋あるいは骨董品屋が不当な売値を提示する場合もあるが、これはたいへん残念なことである。古書は文献資料としての史料として大切にされなければならない、また、骨董品としてではなく非指定文化財として大切にされなければならない。

6. 日本における韓本の研究

日本における韓本の研究は、その淵源が非常に古い。近代に入って、旧韓末から植民地時代に亘り、その価値が分からなかったまま、廉価で売られてしまった古書の多くが外国へ渡っていった。その中には、今はフランス国立中央図書館に所蔵されている『直指』（『白雲和尚抄録佛祖直指心體

要節』)、すなわち世界最古の金属活字本もその一冊である。ところで、かつて韓本が最も大量に持ち出された相手国は日本で、日本の蒐集家及び蔵書家たちによって、数多くの韓本が持ち出されている。旧韓末から植民地時代のみならず、日本への韓本流出は新羅や高麗時代以来のことで、頻繁に侵入してきた倭寇によって略奪される場合もあった。もちろん、こうした否定的な場合ばかりでもなく、朝鮮王に仏経などを求めた日本側からの要請や、朝鮮通信使を含む友好的な関係の所産として、日本には多数の韓本が贈られた歴史もある。

このような韓本がたくさん収集されている機関のうち、筆者が直接訪ねて少しでも調査したことがあるところだけでも⁴⁾、関西大学図書館、天理大学図書館、大阪府立図書館、近畿大学図書館、国会図書館、宮城県立図書館、東北大学図書館、内閣文庫、京都大学付属図書館、京都大学文学部図書館、高麗美術館、凸版印刷博物館、大東急記念館、静嘉堂文庫美術館、東洋文庫、蓬左文庫などであるが、これ以外にも数多くのところに多様な韓本が所蔵されている。ところが、その所蔵先には、韓本に対する調査研究ができる専門司書の数は非常に少ないと言っても過言ではないだろう。

さらに、たいていの図書館では韓本が唐本と区別されずに分類された状態にある。筆者が調査した大部分の図書館の中では、韓本として別途に分類された図書館ですら、その刊行地が朝鮮であるにもかかわらず、中国書として分類されている所が少なくなかった。これは本の題目が中国的で、著者が中国人であることにもよるが、前述したように、その大きな原因としては韓国本と中国本を区別することができる眼識を持っている専門司書の不足という点があげられる。

さらに、研究者の不足という問題点があげられる。実際、数少ない何人かを除き、韓本を調査してリストを作成することができる研究者はほとんどいないと言っても過言でもないというのが、多くの日本人の書誌学者もよく周知の状況である。こうした量的な研究者不足のなかで、現在にいたるまで継続して日本現存朝鮮本を調査し続けている藤本幸夫教授の存在は、日本における韓本研究の現状を示していると言っても過言ではないだろう。特に、最近刊行された『日本現存朝鮮本研究集部』(藤本幸夫著、2006. 6、京都大学学術出版会)は⁵⁾既存の日本における韓本研究の集大成といえると同時に、韓国書誌学においても金字塔と言えるほど、その価値が非常に高いと評価したい。日本や韓国のみならず、世界的な研究成果としても認められなければならないほどの基礎資料であり研究書でもある。特にこの著作に紹介されている韓本関連の研究業績などのリストは、これから韓本研究に入門あるいは専攻しようとする人は参考しなければならないものである。

それとともに、既存の過ちを修正することができる制度的な装置の不在も大きな原因の一つであると言えるだろう。たとえば、朝鮮時代初期に金属活字本として印刷された韓本の完帙が普通本としてだれでも閲覧ができるようにされている場合がある。それはそれでいいのだが、もし韓国にその韓本があるとすれば、少なくとも国家指定文化財として宝物になることを考えるなら、その保存方法が問題にならざるを得ない。それはそれでいいとしても、極端な場合、朝鮮時代の金属活字本の完帙が普通本扱いされているにも関わらず、その木版覆刻本が貴重本扱いされている場合もたまにみられる。ちなみに、韓国では今でもそのような類の木版覆刻本は、その資料的な価値が低く普通に古本屋で比較的安い値段で売られているものである。本当に数多くの本がいまも残っており、その原本である金属活字本も存在しているからである。その木版覆刻本に大事な筆写があれば別問題であるが、そのような特徴的な書誌事項は見当たらない。このような問題を指摘して訂正を勧め

でも、かつての司書が既に貴重本として選定したものであるため修正が不可能である、という説明を聞いたことがある。しかし、何人かの司書により、ある大学の貴重本の選定が修正し始まったということも聞いたので幸なことである。

7. 日本のウェブ上での韓本関連サイト

先述した『日本現存朝鮮本研究集部』の「朝鮮本研究参考文献一覧」には、幾多の論著が紹介されている。しかし、韓本に対してより易しくアプローチができるマルチメディア資料などに関しては紹介がなされていないようである。もちろん、ウェブ上での韓本関連サイトについての紹介は見えない。しかし、現代社会でウェブ上での検索はどんな学問の研究においても大きな便宜を提供してくれるものである。

もちろん研究対象自体が日本に現存する韓本に関するものであるため、ウェブ上でのサイトに関する紹介がないことも理解できる。なぜならば、日本では朝鮮本を含めて貴重書に対する閲覧は勿論、写真撮影などもとても難しいからである。また、実際に日本のどの機関のホームページを開いても、研究資料として直ちに使うことができる場所は全くないぐらいである。さらに、所蔵している資料の詳細なリストや画像などをウェブ上で公開していないのみならず、参考になる情報も僅かしかない。しかし、搜してみれば断片的にはあるが、韓本に関する情報を掲載しているサイトもなくはないのであって、そのなかで私が実際的に使っている何か所かを紹介しようと思う。ただ前述したように、詳細な写真資料等にたどり着くことは、あまり期待しないほうが良い。

1) 少し詳しい情報が得られるサイト

日本現存朝鮮古書データベース検索システム

<http://stl30.itc.u-toyama.ac.jp/dokb/>

大阪府立中之島図書館 韓本（朝鮮本）の世界

http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/shotenji/70_kan.html

全国漢籍データベース

<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki/>

松原研究室所蔵目録 各種書誌データ目録

http://matsu.rcks.kyushu-u.ac.jp/mokuroku/shoshi_jp.html

2) 簡略な情報が得られるサイト

宮城県の国・県指定文化財 > 有形文化財（書跡・典籍） > 朝鮮古刊本

<http://www.pref.miyagi.jp/bunkazai/siteibunkazai/miyagi-no-bunkazai/05syoseki/ken/12tyosen.htm>

東京大学図書館南葵文庫・趙東潤本・阿川文庫など

<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai95/>

鈴琳舎優游文庫

<http://www7a.biglobe.ne.jp/~rinrinsha/main/yuhyuhhp/yuhhpb.htm>

大東文化大学文学部中国学科黄虎洞研究室

<http://www.daito.ac.jp/~oukodou/kosyo/kosyo-14.html>

朝鮮本及び古活字本（東アジア・朝鮮）

http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/saika/d_5.html

高麗美術館「活字の国、朝鮮」

http://www.koryomuseum.or.jp/event/06_summer/index.html

8. 韓国の韓本関連サイト

日本とは異なり、韓国では21世紀の情報化時代を迎えて、韓本の中でも特に貴重本に対するリスト調査結果や、これまで蓄積された情報を果敢にインターネット上で公開するようになった。そして、韓本研究者は現地の図書館や博物館に行かなくても基礎調査などを行うことができるようになった。無線インターネットが普及している韓国では、田舎にある昔の両班の家にある韓本を調査するときも、すぐウェブを通して、調査対象となっている韓本がほかにもどこかに所蔵されているか否か、またどの板本が先刷本であるかなどについて、詳細な書誌情報を得ることができる。まさに韓本研究活動に非常に大きな貢献をしている。

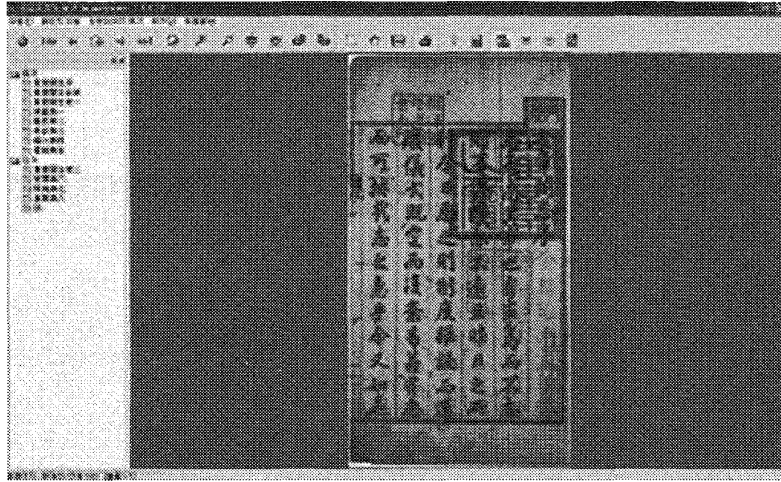
筆者も参加したことがあるプロジェクトであるが、最近何年間に掛けて文化財庁では国宝、宝物を含めた典籍文化財に対するデータベースを作成し、現在、それを公開している。まもなく完全版が公開されるようである。また、個人所蔵家だけでなく、文化財級の韓本の貴重書を所蔵している大学や、図書館、博物館なども、文化財庁と同じように所蔵資料についてのリスト、解題、画像などを公開している。こうした試みは1999年から始まった政府次元で行われている知識情報作業管理事業という国家レベルでの支援を受けた各々の機関におけるプロジェクトの産物でもある。

そして、最近韓国では、書誌論文では脚註にサイトを引用しても、今ではさほど目立つことでもないようになった。そして、日本でもこのようなサイトの紹介は必ず必要であると思われる。こうしたサイトの紹介は、今後の韓本研究をより速かに進めさせると期待されるからでもある。

ただ一つ大きな問題は、これらのサイトを検索するためには、ある程度の韓国語能力が要求されることである。漢字がかなりたくさん用いられているので少しは検索が可能であるかもしれないが、決して容易なことではないだろう。検索にはやはり韓国語能力が必要である。

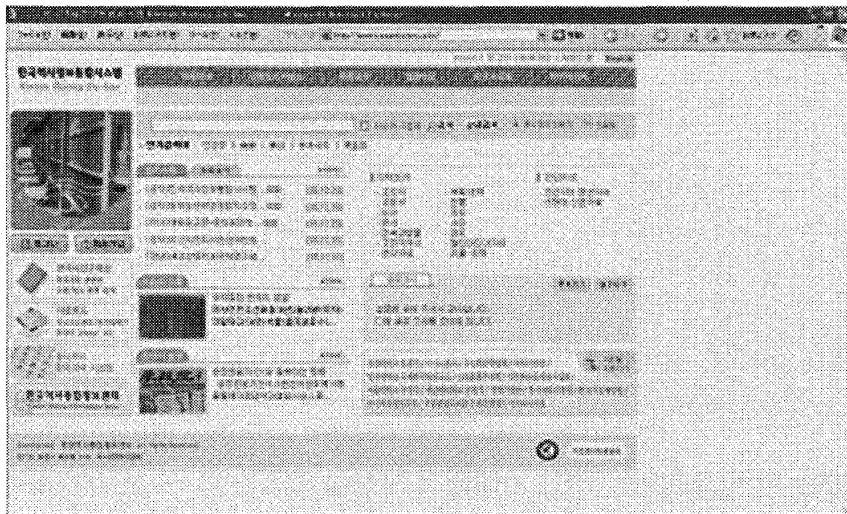
1) 国立中央図書館の韓国古典籍総合目録システム (<http://www.nl.go.kr/korcis/>)

韓本を所蔵している韓国の大学や機関を一括して、目録、解題、原文の画像、翻訳などを検索できるサイトである。すでにデータベースの蓄積が終わった部分に関して、上記のように詳細な書誌事項が確認できるので、大変便利である。



2) 国史編纂委員会の韓国歴史情報システム (<http://www.koreanhistory.or.kr/>)

慶州良洞慶州孫氏書百堂、羅州会津羅州林氏滄溪後孫家、大田安東金氏金英漢所蔵本、法興固城李氏文書、尙州延安李氏息山宗宅、尙州愚山晋州鄭氏愚伏宗宅、安東葛田順興安氏定峯宗宅、安東光山金氏後彫堂、安東水谷全州柳氏ムシル宗宅、驪州李氏玉山精舎古文書、議政府潘南朴氏西溪宗宅、周村真城李氏文書、晋陽河氏丹池宗宅、咸陽朴氏九堂宗宅古文書、海南尹蓮洞宗家の古文書、および韓国歴史関連辞典、データベースと文献の原文や翻訳などを主に提供している。歴史関係のみならず、過去の多様な書籍に関する詳細な書誌なども提供している。また、慶尚大学、国史編纂委員会、ソウル大学奎章閣、成均館大学尊経閣、韓国国学振興院、韓国学中央研究院蔵書閣、民族文化推進委員会などが提供している目録、解題、原文の画像なども参考になる。特に版木やフィルムなども掲載されているので、大変役に立つ。



3) 文化財庁の国家記録遺産 (<http://www.memorykorea.go.kr:7779/>)

国家指定文化財のすべての解題、画像、翻訳などをはじめ、詳しい書誌情報を提供している。韓国を代表する書物の確認ができるサイトである。



4) 国立文化財研究所の海外所蔵韓国典籍文化財 (<http://koreanbooks.nricp.go.kr/>) と
韓国金石文総合映像システム (http://gsm.nricp.go.kr/_third/user/main.jsp)



海外所蔵韓国典籍文化財DBでは、今まで調査された海外即ちアメリカや日本やフランスなどに所在している韓本の目録や簡単な書誌情報が検索できる。また、韓国金石文総合映像システムは現在まで知られている数多くの金石文のすべてが紹介されている。特に研究者によって異なる多様な意見まで紹介しているので、大変参考になるサイトである。



5) デジタルハンゲル博物館 (<http://www.hangeulmuseum.org/>)

ハンゲルの古語が書かれている韓本を参考にしたり、研究をしたりする人にとって、もっとも役に立つサイトである。ハンゲル世界化財団が開いたサイトで、文化財のみならずハンゲルに関するさまざまな情報が獲得できる。時期によって、「ハンゲル国宝展」などウェブ上で特別企画展を開催している。



6) その他

上記以外にも、以下のようなサイトで韓本に関する情報が提供されていて、調査研究に役立つ。今後、さらに多くの原本と、それらについての解題などが提供されることを期待したい。

国立博物館の所蔵品情報サービス (http://www.museum.go.kr/kor/pos/pos_main.jsp)

清州古印刷博物館 (<http://www.jikjiworld.net/>)

嘉川博物館 (<http://www.gcmuseum.org/>)

文化観光部eミュージアム (<http://www.korea-museum.go.kr/index.jsp>)

湖林博物館 (<http://www.horimmuseum.org/>)

華峯冊博物館の「冊と本の歴史」(<http://www.hbookmuseum.co.kr/ex/bookh.html>)

陰城記録歴史館 (<http://www.erhm.co.kr/>)

結語

以上のように、韓国書誌学に関していくつか私見を述べつつ、日本と韓国のウェブにおいて、韓本を研究する上で役立ついくつかのサイトを紹介した。当然のことかも知れないが、日本では日本語だけ、韓国では韓国語だけが用いられているので、これらのサイトを利用するためには一定の語学力が求められる。日本のサイトの場合は漢字が多く用いられているので、韓国人が使う上で、大きな不便はないかもしれない。しかし、周知のように韓国のサイトは少なくとも初級程度の韓国語が分からない場合、ほとんど利用が不可能であると言える。ただ一つ幸いなことに、韓国のサイトでは英語と日本語でも検索できるように、英語版及び日本語版ウェブサービスを開始するための準備が、現在進められていることである。今後、近いうちに日本語でも韓国のウェブ上で韓本が検索できるようになることが期待されている。ただ、韓本の中には諺解本をはじめ、数多くのハンダ本があるので、いずれにせよ韓国語が分からなくてはその研究はできないかもしれない。

以上、私が知っているサイト、あるいは実際に使っているサイトを少し紹介したが、すべての関連サイトを紹介したわけではない。そして、本稿で紹介したサイト以外にも、筆者が知らない、より良いサイトが結構あるかも知れない。むしろ本稿で紹介したものより優れたサイトのほうが多いかも知れない。したがって、こうしたウェブサイトに関する情報の修正と補完は今後とも継続しなければならないと考えている。関心をお持ちの皆様から、多くの助言を賜りたく思っている。
(jiminyura@yahoo.co.jp)

* ハ ジョンヨン、関西大学非常勤講師、高麗大学文学博士（韓国）

1) 河廷龍、2002. 6、『『三国遺事』の編纂と刊行に対する研究』、高麗大学一般大学院史学科 博士学位論文

2) 河廷龍、2005. 8、『三国遺事史料批判』、民族社。

3) 『大阪府立図書館蔵韓本目録』、大阪府立図書館、1968。

『岩瀬文庫図書目録』財団法人岩瀬文庫、1936（韓本・韓版のキーワード）

4) 筆者がこれまで発表した論著のうち、日本所蔵典籍に関して日本語（あるいは韓国語）で発表したもののみを紹介すれば、次の通りである。

河廷龍、2002. 10、「蓬佐文庫所藏壬申本『三国遺事』と列邑分刊」、『高麗美術館研究所紀要』3、日本京都 高麗美術館研究所

河廷龍、2005. 4、「高麗美術館所蔵典籍紀行1、李聖龍旧藏戊申字本『春秋經典集解』」『高麗美術館報』H17-1、高麗博物館（京都）

河廷龍、2005. 7、「高麗美術館所蔵典籍紀行2、沈念祖旧丁酉字内賜本『唐宋八字百選』」『高麗美術館報』H

17-1、高麗博物館（京都）

河廷龍、2005. 10、「高麗美術館所蔵典籍紀行3、李聖龍旧蔵戊申字本『最後の甲寅字』、壬辰字本『青丘詩鈔』」
『高麗美術館報』H17-3、高麗博物館（京都）

千恵鳳……河廷龍、2005. 12、『海外典籍文化財調査目録—日本天理大学天理図書館所蔵韓国本』、国立文化財研究所

河廷龍、2006. 1、「近畿大学中央図書館所蔵順菴安鼎福旧蔵の『纂図互註周禮』について」『香散見草』34、近畿大学図書館

河廷龍、2006. 1、「高麗美術館所蔵典籍紀行4、宮中儀礼の記録整理字本『進饌儀軌』」『高麗美術館報』H17-4、高麗博物館（京都）

河廷龍、2006. 4、「高麗美術館所蔵典籍紀行5、整理字体鉄活字本『甲戌稷』」『高麗美術館報』H18-1、高麗博物館（京都）

河廷龍、2006. 7、「高麗美術館所蔵典籍紀行6、活字の国、朝鮮—朝鮮活字印刷文化との出逢い」『高麗美術館報』H18-2、高麗博物館（京都）

河廷龍、2006. 10、「高麗美術館所蔵の朝鮮本について」『有光教一先生白寿記念論叢—高麗美術館紀要』5、高麗美術館研究所

河廷龍、2006. 10、「天理図書館所蔵の三国遺事について—日本における三国遺事研究動向と関連して—」『ビブリア』126、天理図書館

河廷龍、2006. 10、「高麗美術館所蔵典籍紀行7、再鑄韓構字本李謫公七言古詩について」『高麗美術館報』H18-3、高麗博物館（京都）

河廷龍、2007. 1、「高麗美術館所蔵典籍紀行8、後期校書館印書体字本『桐江遺稿』について」『高麗美術館報』H18-4、高麗博物館（京都）

5) 紙面を通じ、後学の一人として、日本における韓本調査研究のために精進なさっている藤本幸夫先生に深く感謝の意を表したい。

謝辞

筆者はこのほど、関西大学熊谷明泰教授をはじめ、近畿大学日本文化研究所の森上修先生、法政大学の小秋元段先生、古典籍研究会の高木浩明様と会員の皆様、天理大学図書館の金子和正先生、辻本雅英様、および高部萃子様をはじめいろいろな方々から貴重なご助言やご協力を賜り、本稿を作成することができました。ここに深謝いたします。